

母親の育児意識と乳幼児の問題行動

— 子どもの行動観察による事例分析 —

丸澤 由美子・宮本 邦雄

問題と目的

親の養育態度や養育行動と乳幼児の問題行動との関連に焦点を当てて行われた研究の報告は多い(水野、1998)。しかし、その多くは子どもの問題行動の原因を母親の育児ストレスといった、子育てのネガティブな部分に求める傾向があった。これは、母性神話や3歳児神話といった、母親が子どもに与える影響の大きさが特に注目されてきたためであると考えられる(小野、1994)。しかし、子育てには当然のことながら、育児ストレスといったネガティブな部分だけではなく、成長の楽しみなどのポジティブな部分も含まれるであろう。

丸澤・宮本(2003)は、乳幼児を育てている母親を対象にして質問紙調査を行い、育児ストレスや楽しみ、子育てサポート(ソーシャルサポート・子育て支援・子育て情報)、子どもの困った行動の関連を検討した。その結果、子育てサポートが母親の育児ストレスを緩和し、育児の楽しみを増加させ、子どもの行動に影響することを示した(モデル1)。また逆に、子どもの行動とソーシャルサポートが育児意識に影響する可能性(モデル2)と子どもの困った行動や子育て支援が直接的、間接的に、母親の育児ストレスや育児の楽しみに影響すること(モデル3)を報告した。しかし、子どもの行動は母親の質問紙調査による母親が認知した子どもの姿であり、判断のバイアスも考えられるものであった。さらに、以上の関連の妥当性を検討するためには、質問紙調査だけでは見えてこない子どもの行動と母親の育児意識との関連を、個別の事例について調べる必要があると考えられる。

そこで本研究は、第1著者(丸澤)が非常勤スタッフとして保育所で関わっている子どもと

その母親を対象として、個別資料に基づき事例を報告する。母親に対しては質問紙調査を行い、子どもに対しては長期間にわたるVTR記録を用いた行動観察を行った。母親の育児ストレス・育児のたのしみ、子育てソーシャルサポート、子どもの困った行動の質問紙調査による母親の変数とVTR記録により記録された子どもの行動特徴を指標として、個別的分析という視点から、母親の育児意識と子どもの行動との関連を検討する。また2年半後、子どもが3歳児になった時点の母親の養育態度がどのように変化しているか追跡調査を行い、上記の変数間の関連を検討する。

方法

第1期調査:愛知県N市の私立保育園に通っている1歳児7名(男児4名・女児3名)とその母親を対象とした。母親に対しては、フェイスシート、育児ストレス尺度(31項目5件法)、育児の楽しみ(18項目5件法)、ソーシャルサポート(4項目)、子育て支援利用(8項目、利用回数記入)、子育て情報支援(8項目、3件法)、子どもの困った行動尺度(35項目5件法)からなる質問紙調査を行った(丸澤・宮本、2003)。子どもの行動観察として、午前の保育時間にVTR記録を行った(平成14年5月～8月、1人5分間、計17回)。子どもの行動指標としては、大竹喜美子・高橋たまき・守屋国光・次郎丸陸子(1974)を参考に作成したチェックリスト(8項目)を用いて分析を行った。なお保育所においてほぼ毎日、対象児の日常的な行動の観察を行い、そのメモと日誌資料も参考とした。

追跡調査:第1期調査で対象となった母親に対し、2年2-5ヶ月後の平成16年10月に

第1期と同じ質問紙調査を行った。1名転園のため、男児4名、女児2名が対象となった。

結果と考察

まず、第1期調査の母親に対する質問紙調査の結果を取り上げる。表1に7組の母子事例の基礎資料を示した。母親の年齢は24歳から42歳にわたり、第1子が4名、第3子が2名、第4子が1名である。祖父母との同居はFM児の家族のみで、専業主婦はMY児の母親のみであった。

表2は、第1期調査データに基づいた各母親の下位尺度標準得点を示している。太字は±1SDを越えるものである。丸澤・宮本(2003)によると、各尺度について以下のような因子が抽出された。育児ストレス尺度は、子どもの発達と愛着(DA)、子どもの行動特徴(CB)、親としての自信と不満(P)、配偶者との関係(R)の5因子、育児との楽しみ尺度は、楽しみの共有(PS)と成長の楽しみ(PD)であった。子どもの困った行動尺度については、見知らぬ人・場所への恐れ(SF)、注意の持続性と固執性(AP)、視聴覚的敏感さ(AS)、反応の激しさ(RS)、フラストレーション・トレランス(FT)、周期の規則性(RC)であった。さらに

ソーシャルサポート得点(SS)と子育て支援利用得点(I)を母親の変数として用いた。これより、全体として育児ストレスは低く、育児の楽しみは中程度の母親が多い。子どもの困った行動としては、見知らぬ人・場所への恐れが小さく、周期性の面で困った特徴が出ていることがわかる。これらは、保育所での生活や家族以外の他者との相互作用の影響と思われる。

以下に、5ヶ月にわたる連絡日誌の内容と観察者のメモ、行動観察、及び母親の質問紙への回答から得られたプロフィールとの関連を事例毎に考察し、さらに2年数ヶ月後の調査内容と各種資料に基づきそれらの関連の変化を検討した。

結果と考察

1. 事例児TRと母親

TR児は、身体に変に力が入ってしまう傾向がある。例えば、自分の遊びを邪魔されると泣いたり、足や手に力が入り、ピンツとした状態になる。AKがお気に入り、ギュと抱いたりするが力の加減が出来ず泣かせてしまう。以前は、物事に集中すると話が耳に入っていない感じだったが、最近は周りの様子が見えているようで、YSと一緒におもちゃで遊んだり、言葉の真似をしたり、楽しむ様子が伺える。また一時期、お母さんのお迎えの際に、普段できるようなことも「イヤ」と言って、お母さんに甘える姿が見られた。

TRの行動は、図1からもわかるように、5回目の歩行以外は、全体として孤立が目立つ。孤立は1、9、11、15回目で高く、5、12回を底に増減を繰り返している。

表1 各事例の基礎資料

名前	父年齢	母年齢	子人数	出生順	祖父年齢	祖母年齢	仕事
TR	33	29	1	1			有
TK	32	34	2	3			有
HY	44	42	4	4			有
MY	33	32	3	1			
YK	35	31	2	3			有
AK	23	24	2	1			有
FM	36	34	2	1	67	61	有

表2 各事例の各下位尺度標準得点(太字は±1SDを越えるもの)

氏名	DA	CB	P	R	PS	PD	SS	I	SF	AP	AS	RS	FT	RC
	育児ストレス				育児の楽しみ		子育てサポート		子どもの困った行動					
TR	-1.30	-1.49	-0.72	0.09	-0.46	0.22	-0.05	-0.38	-1.19	0.87	0.65	0.52	-1.48	-0.16
TK	1.10	1.33	0.99	0.46	0.56	0.22	-0.61	-0.38	0.08	0.87	-0.64	0.52	-0.25	0.41
HY	0.14	-1.25	-0.21	-0.27	-1.62	-1.83	-0.95	-1.88	-0.46	0.50	-0.21	-0.86	0.24	0.41
FM	1.34	-0.08	-1.23	1.20	0.85	0.22	-0.67	0.62	-0.46	0.50	-1.93	-0.86	0.48	1.28
MY	1.58	0.63	0.14	-0.64	0.41	0.22	-0.78	0.12	-1.92	0.87	-1.07	0.06	1.46	1.28
YK	-1.30	-1.25	-1.23	-0.64	-0.17	0.22	-0.39	-1.88	-1.19	1.25	-0.64	-0.40	0.73	1.57
AK	-0.58	-0.31	-0.38	-1.01	-0.31	0.22	-1.06	0.62	-1.19	0.12	-1.07	0.06	-0.25	0.99

表3 子どもが1歳と3歳の時点での母親の基礎統計資料

1歳児	名前	父	母	子ども数	何子	祖父	祖母	DA	CB	P	R	PS	PD	SS	I	SF	AP	AS	RS	ET	RC
TR	33	29	1	1				6	7	19	6	51	15	29	7	9	11	14	8	7	10
TK	32	34	2	3				16	19	29	7	58	15	19	7	16	11	11	8	12	12
HY	44	42	4	3				12	8	22	5	43	12	13	12	13	10	12	5	14	12
MY	33	32	3	1				18	16	24	4	57	15	16	10	5	11	10	7	19	15
YK	35	31	2	3				6	8	16	4	53	15	23	10	9	12	11	6	16	16
AK	23	24	2	1				9	12	21	3	52	15	11	11	9	9	10	7	12	14
FM	36	34	2	1	67	61		17	13	16	9	60	15	18	12	13	10	8	5	15	15
3歳児																					
TR	34	31	2	1				9	9	25	6	60	15	20	9	14	8	8	10	14	16
TK	34	36	3	2				17	14	25	8	50	15	30	9	17	11	10	8	16	12
HY	46	44	4	4				7	8	19	4	51	14	28	7	14	9	10	7	17	11
YK	36	32	3	2				9	5	33	3	55	15	25	8	18	7	11	7	16	9
AK	25	26	2	1				10	9	20	3	55	15	12	11	15	5	7	8	16	11
FM	38	36	2	1	69	62		13	15	26	12	52	15	27	11	20	8	11	7	16	13

TRの母親は、表2から、育児ストレスがきわめて低いことが認められる。子どもの発達と愛着因子と子どもの行動特徴因子、子どもの困った行動のうち、見知らぬ人・場所への恐れやフラストレーション・トレランス因子が特に低い。つまり、TRの母親は、育児についてストレスをあまり感じておらず、子どもの行動にも困っているという意識も持っていないことがわかった。

TRの孤立は、自分1人で夢中になって遊ぶ傾向が高く、邪魔されると泣き叫ぶといった行動があるため、一見注意の持続性と固執性や反応の激しさといった子どもの困った行動に入りそうだが、TR児の母親はこれを育児ストレスとは感じていない。この点で、本ケースはモデル2にはあてはまらないものであった。

追跡調査によると（表3）、第1期調査でみられた育児ストレスの低さは、3歳児の時もほとんど変化は見られなかったが、親としての自信と不満因子が少し高くなっていった。これは、

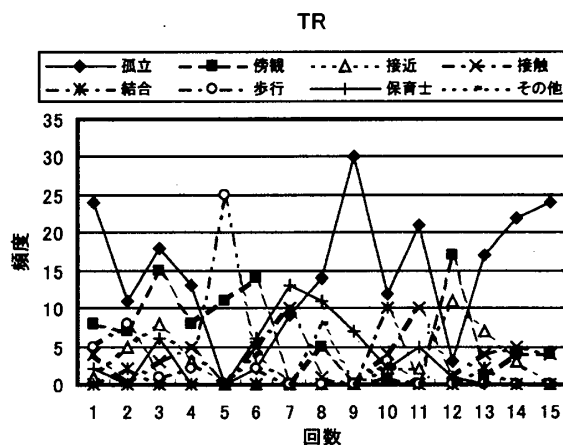


図1 TR児の各項目反応頻度の変化

本事例だけの問題ではなく、前回の調査以後に第2子の誕生により、2人の子を育てる大変さを実感しているためではないかと推測される。

2. 事例児TKと母親

TKは、物や事柄についてのこだわりが強い。生活においても自分の流れがあり、自分が納得しないと、周りが次の事柄に移行していても、自分の行動を続ける。絵本・歌・リズム・パズルが好きで、一人でうたったり、絵本を自分語（自分だけしか理解できない言葉）で読んだりする。

行動観察の結果からは、事例児TR同様に、孤立が目立つ。6回目と10回目に孤立行動と傍観行動が逆転し、14回目も孤立と傍観行動の頻度が接近している。全体として、反応頻度が大きく上下し、行動の変動が大きいことがわかる（図2）。

TKの母親は、表2に示すように、育児ストレスのうち、子どもの発達と愛着と子どもの行動特徴因子が高得点を示しており、子どもの発達の側面や行動にストレスを感じていることがわかった。TKの行動は、こだわり行動が強く、集中していると周りの音が聞こえていないような様子が伺える。これは、育児ストレスのうち子どもの発達と愛着や子どもの行動といった項目になるであろう。TKの母親にこれらの項目がストレスを感じさせていると考えられる。部分的ではあるが、モデル1に該当するケースであると考えられよう。

追跡調査からは（表3）、子どもの発達の側面や行動へのストレスが3歳になると減少して

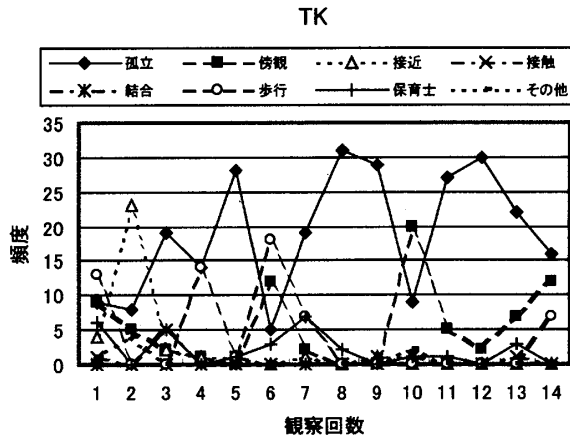


図2 TK児の各項目反応頻度の変化

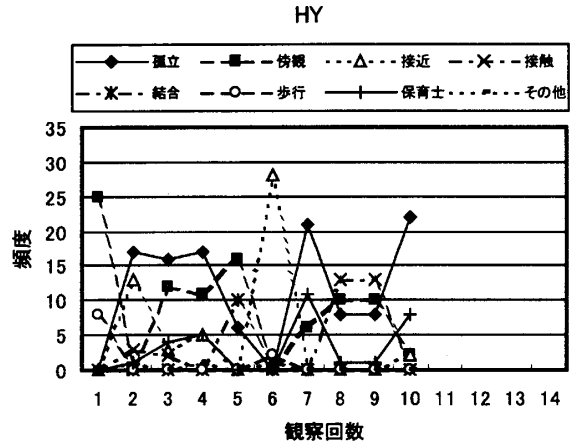


図3 HY児の各項目反応頻度の変化

いることが伺える。これは、子どもの困った行動の因子得点の結果でも明らかなように、母親が子どもの行動の変化を認識していることと、実際に1歳児の時に比べると本児のこだわり行動も軽減し、語彙も増え、落ち着いてきた事があげられるであろう。

3. 事例児HYと母親

HY児は4人兄弟の末っ子という事もあり、のんびり、マイペースである。泣いている子がいると頭をナデナデしに行く。自分の使っていたおもちゃや絵本を取られても泣いてしまい、噛んだり叩いたりという行動には出ない。

HYの行動は、図3からもわかるように、1回目の傍観と6回目の接近以外は全体的に頻度5から20の間で落ち着いている。これには、各行動のバランスがよく、偏っていないことが示されている。

HYの母親は、子どもの行動因子の育児ストレスが低いものの、育児の楽しみ(楽しみ共有・成長の楽しみ)もきわめて低く、子育て情報の利用も低いことがわかる(表2)。つまり、HYの母親は、子どもの行動にストレスを感じていないし、特に、育児の楽しみにおいても、楽しさを感じていないことがわかった。これは、丸澤・宮本(2003)では取り上げられていないパターンであり、今後検討する必要があるだろう。

1歳時には、母親が子どもの行動にストレスを感じていないし、育児に楽しさも感じていない事例であったが、3歳児には、育児ストレス

が少しではあるが高くなってきている(表3)。これは、HYが第4子ということもあり、他の子に手がかかっていたが、現在は上の3人は就学し、母親も落ち着き、本児を見る時間的余裕も出来たために、逆にストレス感じてしまっているのではないかと推察される。

4. 事例児FMと母親

FM児は、言葉が最近出始め、周りにも興味・関心を示すようになってきたが、少し前までは、自分が集中してやっている事柄を途中で次の行動に移されそうになると、泣き叫んだり、バタバタ手足をばたつかせ抵抗したりした。また、自分の欲しいものを友達をもって遊んでいるとそのおもちゃしか見えていない様子で、そのおもちゃを奪ったりした。しかし、最近はずいぶんそれらの行動も減り、変化してきた。

FMはあまり動き回ったり、激しい行動はせず、自分の気に入った行動を繰り返し行ったり、見続ける傾向がある。それが、図4の高レベルの孤立や傍観にも伺える。前半(3回目)までは、様々な行動が多く交差しているが、後半(4回以上)には、単調なパターンに変化していった。

FMの母親は、育児ストレスのうち、子どもの発達と愛着、配偶者との関係因子において高い得点を示した(表2)。また、子どもの困った行動においては、視聴覚的敏感さが特に低く、周期の規則性が高いことが分かる。つまり、子どもの行動や子どもへの愛着、夫との関係にストレスを感じており、時間的規則性や習

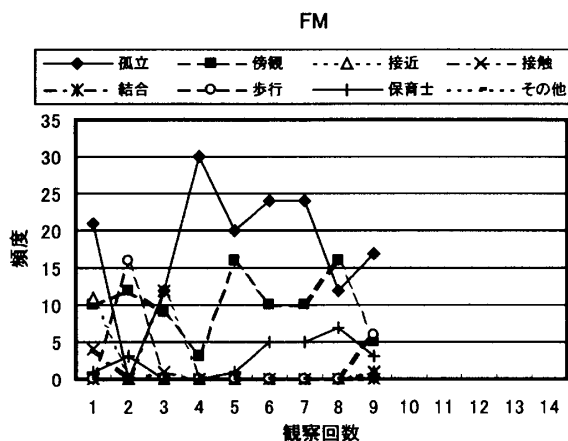


図4 FM 児の各項目反応頻度の変化

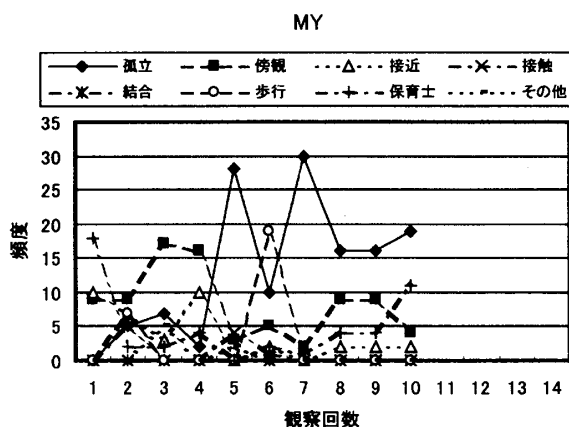


図5 MY 児の各項目反応頻度の変化

慣といった面で困っていることがわかった。FMの自分の好きな行動を繰り返すことや自分の好きなことに集中し、周りが見えないといった特徴が、母親のストレス因となっていると考えられ、また配偶者に対するストレスも伺われることから、この事例はモデル1を支持するものである。

1歳時には、子どもの行動や子どもへの愛着、夫との関係にストレスを感じており、時間的規則や習慣といった面で困っていたが、3歳になると、親としての自信と不満因子が高くなっていった(表3)。これは、子どもの困った行動因子から明らかのように、母親が子どもの行動に困り始めているからであると推測される。実際にも、本児は人や場所にこだわる姿がよく見られる。

5. 事例児MYと母親

MY児は、自分の生活の順序やペース等のこだわりがある。そのため、それが乱されると泣き叫んだり、噛みついたりして抵抗する。散歩などで外に出る時は、担任保育士が近くにいると安定して遊ぶことができる。いつもボーとした感じで、言葉もあまりなく、言葉がけにも無反応の時もある。

MYの行動は(図5)、5回目や7回目の孤立、6回目の歩行、3、4回目の傍観以外は、0～10の頻度の中にあり、動き回るといよりは、比較的落ち着いた感じが読み取れる。

MYの母親は、表2に示すように、子どもの発達の側面や子どもへの愛着に関するストレス

が強く、子どもの人見知り・場所への恐れや視覚的・聴覚的敏感さには困っていないが、日常的な世話に関わる部分や時間的規則性・習慣といった側面では困っていることがわかる。これは、行動観察の結果と母親の質問紙への回答結果から、子どもの困った行動によって育児ストレスが引き起こされていると考えられ、モデル1に該当するケースといえよう。なお本事例については、他園への転出によって、母親に対する追跡調査はできなかった。

6. 事例児YKと母親

YK児については、保育所の中の職員でも、普段から関わりがない者に対してと泣いてしまい、自分の知っている職員にしがみつき、離れないほど人見知りが激しい。自分で遊んでいたおもちゃや絵本など、他児に物を取られることが多く、その際も、取り返すといった行動にでるのではなく、保育士に泣いて訴えに行く。

YKの行動は、図6からもわかるように、孤立や傍観が多く、5回目に孤立行動と傍観行動が逆転する。全体的に動き回るといよりは、周りがやっている行動を見ている方が多い。

YKの母親は、子どもの発達の側面や子どもへの愛着、子どもの行動特徴、親としての自分への自信や欲求不満といった点について、ほとんどストレスを感じていない(表2)。また、子どもの人見知り・場所への恐れには困っていないが、物事へ取り組む姿勢の持続性やこだわりといった点に困っている。この事例は、保育所での愛着や人見知りの問題について、母親は

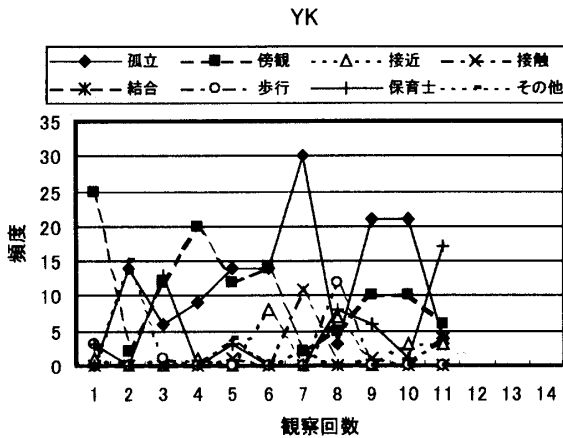


図6 YK 児の各項目反応頻度の変化

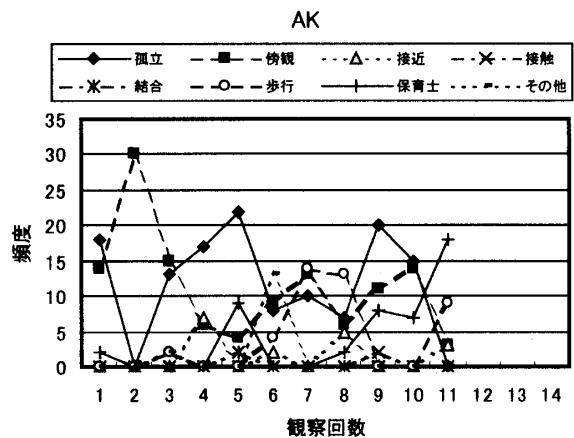


図7 AK 児の各項目反応頻度の変化

ストレスを感じていないという点で、いずれのモデルにも該当しないケースである。

第1期調査では、母親はほとんど育児に関するストレスを感じていない。しかし3歳時では、親としての自信と不満因子が倍近くに高くなっていた(表3)。これは、1歳時に認められた見知らぬ人・場所への恐れが、現在は以前よりさらに高くなっており、親としての対応に困っているからではないだろうかと推測される。また、第3子が誕生した事による本児の変化(情緒的不安定さ)も影響していると考えられる。

7. 事例児AKと母親

AK児は、他の子に比べると言葉が少なく、ウンウンと首をふるといったジェスチャーが多い。友達と遊ぶというより、絵本を見たり、保育士との関わりの中で遊んだりすることが多い。クラスの子ども達は、最も年少のAKが可愛くて「Aちゃん」と寄ってくるが、力まかせに抱かれるので逃げる。以前は泣き顔ばかりだったが、最近は笑顔がよく見られるようになった。

AKの行動は、図7に示すように、傍観は2回目をピークとして、減少し、孤立が増え、8回目以降、接触が徐々に増えている。これは、今までは周りのやっている取り組みや行動を見ているだけであったのが、孤立的ではあるが自分で行動する方へ変化し、さらに、人と関わる行動(接触)へと変化していることを示している。

AKの母親は、ソーシャルサポートが少ない

ものの、配偶者との関係が良好なために、子どもの行動に関しては困っている点がないことがわかった。

追跡調査の結果からは(表3)、1歳時と同様、育児に関して困っている因子は認められず、現在も安定した関係が持続していることがわかる。

以上をまとめてみると、丸澤・宮本(2003)によって報告された、母親の育児ストレスの子どもの困った行動へ及ぼす促進的影響、ソーシャルサポートと子どもの困った行動の育児ストレスへの抑制的促進的影響が、事例研究において確認されたといえる。すなわち、個別検討において、母親の育児ストレス・育児の楽しみやソーシャルサポート・子育て支援・子育て情報、子どもの困った行動という要因間の関連をみると、母親の育児ストレスが子どもの困った行動に影響するというモデルや子どもの困った行動が母親の育児ストレスに影響するというモデル、ソーシャルサポートが育児ストレスを軽減するというモデルは支持されたといえよう。

しかし、第1期の行動観察は、1人1回5分という短いVTR記録であり、事例児の行動の特色が顕著に表れないまま観察時間が終わってしまうということもあった。また、今回の事例児の母親は、産休の場合を除き、全てが有職者であったため、子育て支援や子育て情報の利用度は低かった。しかし、それは決して「利用しない」ということではなく、保育士や職場の同僚が子育て支援者や情報提供者となっていたと

考えられる。その点においても、今後質問紙調査における調査の項目や実施方法が課題になるであろう。

引用文献

- 小野けい子 (1994) 現代日本の母性意識—世代差と職業差の調査より ミネルヴァ 書房
- 大日向雅美 (1988b) 母子関係と母性の発達 心理学評論, 131,32-45.
- 野澤みつえ (1989) 親業ストレスに関する基礎的研究 関西学院大学文学部教育学科教育年報, 15,35-56.
- 丸澤由美子・宮本邦雄 (2003) 母親の育児意識と乳幼児の問題行動—子育て支援との関連— 東海女子大学紀要, 23,159-165.
- 大竹喜美子・高橋たまき・守屋国光・次郎丸睦子 (1974) 集団遊び場面における幼児の行動分析 (2)—観察された行動の分類基準— 日本心理学会第38回大会発表論文集, 534-535.
- 水野里恵 (1998) 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第1子を対象にした乳幼児期の縦断研究 発達心理学研究, 9,56-65.
- 菅原ますみ・島悟・戸田まり・佐藤達哉・北村俊則 (1994) 乳幼児期にみられる行動特徴—日本語版 RITQおよびTTSの検討— 教育心理学研究, 42,315-323.
- 菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島悟・佐藤達哉・向井隆代 (1999) 子どもの問題行動の発達：問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から 発達心理学研究, 10,32-45.